



社 会 福 祉 法 人

るうてるホーム No.132

(後援会ニュース)

2014年12月7日発行



「クリスマスおめでとうございます」

チャプレン 滝田浩之

先日、ある姉妹をホームから御国へとお送りいたしました。入居されてすぐに洗礼を受けられた姉妹でした。私は最初、この姉妹に洗礼を授けることを戸惑っていたところがありました。それは姉妹が以前いた施設では熱心にある宗教を大切にされていたことを知っていたからです。ホームがキリスト教主義の施設だからという理由で洗礼を受けるのであれば、むしろご本人が大切にされてきた信心を大事にして欲しいという願いがあったからです。しかし、姉妹は洗礼を受けることを望まれ、イエスさまは洗礼を受ける動機や理由を問わず求める者に与えるに違いないと信じて洗礼式を行いました。

るうてるホームのチャプレンになって教えられることは、人生には外側からでは想像もつかない様々な重荷があるということです。その意味では姉妹の人生もまた、筆舌に尽くしがたい重荷を負うものでした。そして、それは家族全体を覆うものであり、一般論として家族はかくあるべしでは決して解決しない破れ、そしてそれに伴う痛みを伴うものでした。

チャプレンとして、姉妹の人生のひとコマを教えて頂いたり、あるいは職員の方

方から、その家族のことをお聞きする中で、私は姉妹が、なぜ洗礼を受けることを求められたのか、むしろ姉妹が洗礼を受けてから、より一層知ることができていくという不思議な経験をさせて頂きました。そして姉妹がるうてるホームに来て熱心に洗礼を受けることを望まれたのは、姉妹のいわば叫びだったのだと今は考えるのです。「助けてください!」という叫びです。「支えてください!」という叫びです。

この叫びにホームが少しでも「支える手」として、「助ける手」として用いられていたなら、何よりも姉妹が、キリストが自分を支えておられることを肌で感じてとっていてくださったなら、これほど大きな喜びはありません。

クリスマスが来ようとしています。主が「慰め手」として、「弁護者」として、何より「助け手」として来てくださっていることを、私たちはこの場所を通して証ししていきます。建替えから一年、福祉への風当たりは強く、皆さんの支えなくしては乗り越えることができません。どうか私たちの「支え手」と「助け手」となってください。お願い申し上げます。

「たくさんの思い出を携えて新天地へ」

軽費事業部長 中村みどり

昨年10月、新しい建物をいただいて新天地での生活が始まりました。諸教会のお仲間たち、ボランティアの方々、職員のOBのお働きもあって入居者の方々の荷物の整理や、お掃除など手際よく片付けてくださり新しい生活をスムーズに始めることができました。不安な思いや戸惑いを払拭させてくださる心強いお支えをいただきました。この一年をあらためて皆様に感謝申し上げます。

ケアハウスの一日は朝食に始まります。パン食の方、ご飯を召し上がる方、選択は自由です。暖かいみそ汁の香りが家庭の朝の雰囲気を感じさせます。食事を終えるとエレベーターで3階に行かれる方20名ほどいらっしゃいます。朝の礼拝が9時に始まります。特養の方々も車椅子や押し車を押しながら参加されます。ケアハウスの方々が自発的に礼拝当番を決めて日々の担当を計画しておられます。週1回はチャプレンが礼拝担当を引き受けてくださり、引き続き聖書の学びをする時間を与えてくださいます。始まりは全員で賛美歌を高らかに歌い、担当者が聖書の箇所を拝読し、聖書日課を読み、担当者の祈りに全員がこころあわせて静かに祈る、この「ひと時は」るうてるホーム開設から続けられています。そして新しい建物でも引き継いでこられたことは何物にも代えられない喜びです。

日曜礼拝は地域の教会や入居されている方々の母教会から牧師や信徒の方々が来てくださり継続されています。美しい礼拝堂でにぎやかに出会いを楽しんでおられます。諸教会の信徒の方々の賛美フラ、ハーモニカによる賛美、コーラスの方々の賛美を楽しむひと時もあり、お交わりの時間も多くなりました。ご自分の信仰を人生の終わりまで保ち続けたいと思う方々が多くいらっしゃいます。ケアハウスから特養に移動した方もおられますが、自分では礼拝に行くことができなくても、職員の手を支えられて礼拝に参加しておられます。素敵な礼拝室はお仲間や、親しき人との出会いと神様との交わりのひと時を与えて下さいます。

ケアハウスは自立をお支えする、「介護予防施設」であることから、できるだけ日常生活をご自分で計画して自由に過ごすことができるように配慮しています。朝の時間は、デイサービスに出かける方が「行ってきます」と声を掛けて出かけます。グランドゴルフの試合に行く方、買物、病院、それぞれの一日が始まり豊かな時間を過ごしていることを感じ、安堵する瞬間です。入居しておられる方々の年齢は60歳代から最高齢の方97歳まで。

少しお体の変化があっても介護保険のサービスを上手に利用してご自分なりの生活を楽しんでおられます。ケアハウスのお風呂は特に個浴は皆様が自由に利用できるため、好評です。大浴場は数人のお仲間が汗を流しお話しする機会を楽しんでおられます。

各ユニットの暮らしは、初めはぎこちない様子もありましたが、さすが、女性のパワーはたいしたもの。お料理に、お菓子にと手作りを楽しんでおられます。手作りには愛情が溢れていますから、皆様の笑顔がほころんでいます。暑い夏には日よけのゴーヤがすくすく育ち、大きくなったゴーヤはあつという間にゴーヤジュースに変身。この夏を乗り越えた最大のパワーの源はこれだったかもしれません。「支えつつ支えられて」の言葉がケアハウスに暮らす方々の中にも浸透しているように思います。

ホームの玄関に立ち止まって十字架を見上げるとこころ引き締まる思いがいたします。また、業務を終えて帰るときには、薄暗い中にくっきりと輝くステンドグラスを眺めると豊かな気持ちを感じつつ我が家へ向かう事ができます。洗足のキリストの姿は働くものの理想の姿ですから、「今日の働きはどうだったか」と問われているような気がいたします。建物の姿が「ホームの理念」をあらわすシンボルとして内外に示されています。さて、働く者としてこのシンボルにふさわしく理念を貫いていく、継承する気持ちを新たにしていけることが求められるのではないのでしょうか。

「今持てる力を精いっぱい」

地域支援事業部長 廣瀬雅典

“今持てる力以上のことはできない。”
これが、移転後の一年を振り返っての私の実感です。

移転の2年半前、職員間でも移転に向けての議論が始まり、私自身もいろいろな構想をもつようになっていました。

「移転を機に、あんなこともやりたい。」
「移転を機に、こんなことはやめよう。」
「移転を機に・・・」

当時を振り返ると、移転は日ごろの実践や事業運営の方法などを改めて深く考え直してみる機会となり、夢や理想を語り合ううちに何か“移転を機に”自分たちの持てる力が増大し、すべてが一気に解決し、理想的な環境となり、レベルアップした職員集団になり、すばらしい支援を実践できるようになる、そんな昂揚感を抱いていたように思います。

もちろん、移転が迫ってもそんな都合のいいことが起こるわけもなく、引っ越しの準備や新たな環境での支援方法の具体的な検討を始めると、日ごろから私たち職員が抱えているであろう課題がそのまま表出してしまっていると感じはじめていました。

発信力や意思疎通の弱さ、目標共有のあいまいさ、全体を見据えての自らの行動の選択の不確かさ、日々の支援を言語化する能力のつたなさ…。慌てて解決に向けて取り組んでみるもの日ごろからの課題であるだけにそう簡単に乗り越えられるわけもなく、移転を何とか成し遂げるために自分たちの今持てる力で何とか目の前に迫るハードルを一つ一つ飛び越える、そんな毎日だったように思います。

そんなドタバタの中でしたが、今回の移転で私たちは改めて日ごろの実践を吟味し直す機会、すべての入居者様・ご利用者様・職員が一つに集える建物、そして、すぐ隣

に支援を一緒に取り組む仲間が居る環境を与えられました。最初は何かぎこちなかった職員関係も、一年が経つと少しずつ小さなたぐさんのつながりが生まれています。小さなつながりが広がってくると、支援に迷ったらすぐに相談し合える、悩んだり気になったりすることがあればすぐに相談できる、やりたいことを思いついたらすぐに披露できる、そんな環境に変化し始めています。

こんな環境の変化によって、私たちは自分の仕事だけではなく他の事業所の仕事への関心が深まりました。この仲間と一緒に持てる力を高めることができるかも、という思いを抱けるようになりました。その結果、職員が足りない事業所への職員同士の応援も頻繁になりました。職員の発案で、入居者様、ご利用者様のニーズを解決するための公的制度の枠を超えたサービス提供の検討もはじまりました。勤務が終わった職員有志が集まり、例えば介護保険法改正の研修など研修会や勉強会なども始まりました。

こうした取り組みで職員の持てる力が一気に増し、課題を一気に解消して成熟した職員集団となってすばらしい支援を実践できるようになる、そんなことは起こりえないことを今は理解しています。けれども、この一年の職員同士の連帯を土台にした一つ一つの取り組みが、私たちの持てる力をたとえ少しずつでも高めていると信じています。

“今持てる力以上のことはできない。”

あの時そう痛感したからこそ、今は、私たちの持てる力を少しずつでも高めていけるよう、毎日を大切にしていこうと思っています。



「よりよいサービスを目指して」

通所事業部長 杉本 匡子

通所事業部にとって新施設への移転は大きな転機となりました。新しい施設では、利用者が変わり、ハードが変わり、職員の異動があり、障害のある方々への新事業発足がありました。

開設当初は、高齢では、それまで行っていたサービスの延長となりました。新施設でのサービスを職員で長い時間議論し、計画をしました。しかし、慣れないハードにとまどい、新しいことになかなか取り組むことができず、ジレンマに苦しみました。また、利用の申し込みも多く、日々の業務をこなすことで精一杯となりました。

そんなある日、お客様のつぶやき「今、私なにしたらいいの？することないやん。」が聞こえました。それは、小規模デイを利用されていた方からのものです。定員 35 名と定員 10 名では、職員のお客様への対応の親密さが違います。また、小規模では、お風呂もないので、時間の余裕が違います。しかし、お客様の気持ちに答えたいという一心で、チームや、ミーティングで話し合いを進め、新しいプログラムの始動へととなりました。体を動かすプログラムや、手工芸、麻雀、囲碁等を取りまぜて、お好きな時間を過ごしていただきました。今では、プログラムも起動に乗り、また新しい取り

組みを始めたところです。

障害分野では、生活介護という介助の必要な方への通所サービスと、就労継続支援 B 型という就労までのお手伝いをする事業を始めました。生活介護では、利用者同士でお好きな時間をすごしておられます。これも最初は何かしなければならないのではないかと悩みましたが、家を出て自分の居場所を作ることが大事なことではないかと感じています。就労継続支援 B 型では、ホーム内の清掃作業の委託を受け支援活動を行っています。生活での相談をふくめながら、働く喜びを感じて通所していただけるように働きかけをしています。

当事者の親なき後を住み慣れた地域で過ごせるよう、るうてるでお支えできるよう構築していきたいと思えます。

通所事業は利用までに、体験をしていただくシステムがあります。サービスの評価が利用率に顕著にでる事業部です。選んでいただける施設になるように日々問題意識を持って取り組んでいかなければいけません。

自分たちのサービスに自信を持ちつつ、見直しをしながら、日々サービス向上を目指して立ち止まらずに進んでいきます。



「ユニットケアへの移行の中で」

特養事業部長 高田真希

特養では昨年10月の移転以降、ユニットケアに取り組んでいます。私たちには「個別ケアを充実させたい」、「家庭的な雰囲気大切にしたい」という強い思いがありますが、今まさにそれに向かってチャレンジを重ねているところです。

そのような中で、お客様お一人お一人への視点は確実に深まり、生活支援の内容も様々な展開が見られるようになってきています。例えば、信仰を大切にされている方には、毎朝礼拝にお誘いし、日曜には主日礼拝へ参加していただいています。希望される方には、ご家族や職員付き添いのもと、母教会へ行かれる方もおられます。最近では、隣接の大東市や大阪市内の教会まで行かれた方もあり、それぞれたいへん喜んでおられました。最期の過ごし方や葬儀のもち方について相談をお受けすることもあります。その際は、内容に応じ、チャプレンや母教会の牧師先生にも話を聴いていただいています。

生活支援をさせていただく職員は必ずしもクリスチャンではありませんが、「お客様が大切にしていること」を理解し、その方と信仰とを結びつけて支援を展開していくことについては、ごく自然に成されていると思います。

また、移転以降、ホームでの葬儀を希望される方も増えています。ホームではキリスト教式の葬儀となりますが、信仰の有無にかかわらず、ご希望があれば執り行われます。葬儀をされない場合でも、ご家族の意向で一旦ホームへ寄ってくださることがあり、玄関先などでお別れの時をもたせて

いただいています。このように、利用してくださった方のご家族が、親しみをもってホームや共に過ごした仲間を思い起こしてくださることを今後も大切に考えていきたいと思っています。

最近では、看取り（ターミナルケア）について、ご家族から具体的な相談をお受けすることも出てきています。病院ではなく、ホームで顔なじみの職員のケアを受けて最期まで過ごしたいというのが趣旨です。看取りに向けての支援は、まだまだ試行錯誤の部分の大きいですが、十把一絡げで議論するのではなく、お一人お一人への関わりを通して学びを深めていきたいと思えます。

ユニットケアに転換し、お客様と職員の関係性はより深くなりつつあると感じています。また、それに呼応し展開するサービスも少しずつ変化してきています。今後もチャレンジを重ね、ケアの質を高めていきたいと思えます。応援、よろしく願いいたします。



「移転後一年を経過して」

総務部長 米田 節子

後援会の皆様のお祈りによって新しいるうてるホームが私達に与えられてあつという間の一年が過ぎました。建て替え前のホーム、特に軽費ホームは約50年を経過した誠に思い出深い建物で、敷地内の桜の1本1本や天高くそびえていたメタセコイアのそれぞれに植樹した時の先輩達の思いがいっぱいに詰まっていたから、それらを残してくるのは心苦しいものでした。

前のホームをご訪問して下さったお客様は皆さんが「ここに来ると何だか懐かしい気持ちになります」とおっしゃって下さいました。建物は新しくなりましたが、今度のホームもまた皆様から故郷として受け入れて頂けるだろうかの思いを持って過ごした一年でした。

施設としての建物はもちろんバリアフリーですし、廊下は広々として車椅子でもすれ違ふことができます。居室のトイレもゆったりとしています。設備もお風呂や各所の手すりをはじめ、これまで培ってきた介護力を十分発揮できるように整えました。さて肝心の「心」はきちんと命の吹込みができていますでしょうか。

幸いなことに新築移転後のるうてるホームへは本当に多くの方が来訪されています。竣工直後はそれでもきっと沢山来られることだろうと予想していましたが、1年を経過した現在でも引き続き多くの方がお見えです。入居ご希望の方や、デイサービスの

ご利用ご希望の方、事業所のケアマネさんもちろん来られますが、嬉しいのはご家族やご友人、知人の方が本当によくお訪ね下さっていることです。広くなった居室には泊まって頂くこともできますから、ゆっくりとホームで過ごしてもらっています。

毎朝の礼拝はこちらに来ても続けられています。特筆すべきは日曜日の主日礼拝でしょう。ルーテル教会の牧師先生を中心に、様々な先生方が関わって下さり、1日も空くことなく続けられている礼拝ですが、こちらも先生とご一緒に各教会の信徒さんが毎週のように来て下さっています。実際にホームをご覧になって、またお祈りに覚えて頂けるのは感謝なことですし、私達と思いを共にし、神様に守られているこのるうてるホームで自分らしく生活を送りたいと思ってもらえたら、これに勝る喜びはありません。

私達はいつも、最初にホームを造ろうと決心された先輩の思いを決して忘れることなく、今私達がこの地で神様から託されている事業を進めていきたいと強く感じています。現在は主に高齢の方々と障がいの方との関わりですが、次に私達がどう進んで行けばよいのか、それは神様の腕としての私達の働きとしてきっと与えられる道があると信じています。

どうぞ今後ともお支えを下さいますようご指導、ご鞭撻をお願いいたします。



「るうてるホームを地域へ広げる」 ～るうてるホーム 100 年後につながる取り込み～

常務理事 石倉智史

2009年に立てた中長期計画については今年度をもって最終年とし、計画の評価とともに、次期中期計画策定へ向けて新たな検討をはじめています。移転計画は計画通り実現しましたが、この建物を活かした事業展開はこれからが正念場です。また人材育成についても、組織化や次世代育成についての取り組みを継続して行うことができ、少しずつではありますが組織としての一体感も増してきたように思います。

昨年10月の移転以降、地域の方々に気持ちよく受け入れてもらえるだろうか、新しいお客様は来てくれるだろうか、と当初はやきもきすることもありましたが、連日多くのお客様がデイサービスに来て下さったり、見学や相談などの問い合わせも地域の方々から多くいただくことができ、感謝の毎日を迎えることができました。つい先日も移転一周年を記念して「ウェルカムるうてる」という小さなイベントを行いました。なんと100名を超える地域の方々に来ていただき、当日用意をしたぜんざいやおでんなどがあっという間に売り切れてしまいました。またご高齢の方々のみならず、小さなお子様を連れた若いご夫婦もたくさん来場して下さい、ゲームコーナーでの子供たちのにぎやかな声がホーム全体に響いた普段にない光景を見ることもできました。

この一年が神様に守られてきたことを感謝しつつ、今こうしてまた新たな一步を踏み出す時が与えられています。次期中期計画では、第一に人材育成に重きをおいた計画をたてていくことが大切であると考えています。ご存じのように福祉業界全体が人手不足の状況になっており、いかにして離職を防ぐかと同時にいい人材と出会えるかが鍵となってきます。近隣の大学、専門学校、高校はもとより、全国のキリスト教系の大学などとも連携を強化し、実習生の受け入れや就職ガイダンスへの参加など積極

的に関わっていきます。

また、就職後の研修体系の充実をはじめとして、具体的なキャリアプランがたてられるような育成体制を早期に構築し、資格取得のための奨学金の創設なども視野にいられて職場環境の向上を目指していきます。

二つ目は地域貢献への取り組みです。これから迎える超高齢社会では、地域での共助、互助が求められています。わたしたちが培ったノウハウを活かし、制度の枠を超えて地域に対して様々なサービスを広げていくことに取り組んでいきます。具体的には子育て世代や子供たちに施設設備を開放していくことと、大規模災害時や生活困窮者へのシェルターの役割などが考えられます。そして三つ目には、もちろんこれらのことに取り組んでいくためには本業である事業を安定して経営していかなければなりません。経営目標を明確にし、計画的に実施できるよう組織体制のさらなる進化が必要です。幸いわたしたちには、「るうてる法人会連合」という強い味方があります。そこでの資源を有効に活用していくことで、他の社会福祉法人とは違うエッセンスをサービスに加えていくことができると信じています。

今後予定されている介護報酬の改定をはじめとして社会福祉法人への風当たりはますます強まってきています。こういう時だからこそ、私たちは思いを一つにして「支えられつつ、支えて」ということを実践していかなければなりません。

移転してはじめての春、旧地から持ってきた小さな桜の木は植木鉢の中で奇跡的に根付きました。あの玄関先にあった大木のようになるまでには随分と時間がかかるかも知れません。どのような困難な時にあっても私たちは日々の祈りと感謝をもってすべてを神様にゆだねて進んでいきたいと思っています。

